

2019年1月16日（水）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさん WS 屏風を観察する—視覚的なストーリー—

1,11 回目のご来館

マクミランさん 11 回目のご来館（1 月 16 日）では、和歌を専門とする若手研究者・岡本光加里さん（東京大学大学院）をお招きし、屏風仕立ての『扇の草紙』についてのワークショップを行いました。

2, 屏風仕立て『扇の草紙』について

マクミランさんが扱っておられる『扇の草紙』は二種類あります。ひとつは卷子本『阿不幾集』で、もうひとつは屏風に仕立てられた『扇の草紙』¹です。



¹ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200015700/viewer>

² 安原真琴「新出・国文学研究資料館蔵『扇の草子』屏風一書誌と

この屏風は、12 枚の料紙が貼られた六曲一隻屏風ですが、料紙の大きさからもともと奈良絵本（室町時代末期から江戸時代前期にかけて、公家・武家や新興の町人層の婦女子を対象に作られた濃彩色絵入の写本）であったものがばらばらにされ、17 世紀初期頃に屏風に仕立てられたのではないかと考えられています²。

各葉には 3 つの扇絵と和歌が配されているため、全部で 36 の扇絵と和歌がありますが、元々の奈良絵本はもっと大部の作品であった可能性があります。

今回は、ひとつひとつの歌というよりは、屏風に仕立てられた作品をじっくり観察し、卷子本とは何が違うのかを考えてみることにしました。



翻刻一」（『立教大学日本文学』111、2014 年 1 月）

2019年1月16日（水）

3,さまざまな発見

まずマクミランさんは、各葉の背景（扇面の周り）に柳の絵が描かれていることに注目されました。このような背景画があるものは珍しいということが、先行研究で指摘されているのですが、マクミランさんの着眼点は、同じく扇面の周りに散らし書きされた和歌と柳が重なって見えるということでした。

たしかに、くずし字で和歌も柳のように揺れてみえます！

マクミランさんのご関心のひとつに、日本の文芸作品の特徴のひとつである絵と文字が融合しているということがあり、マクミランさんならではの指摘です。

岡本さんは、和歌とは関係なく、扇絵同士の関連でストーリーが展開していることを指摘されました。

たとえば次の三首は、同じ葉に配されている歌ですが、あまり関連性はありません。

- ①「桜ちる木の下風はさむからて 空にしられぬ雪そふりける」②
- 「小枝ふく嵐のかせの我ならば をしきにはなはちらさゝらまし」
- ③「思ひやれとふ人もなき山中に かけひの水の心ほそさよ」

しかし三つの扇絵【図1】をみると、上と中の扇に描かれた桜の花が繋がっているように見え、満開の桜の大木を思わせます。中の扇では、桜の木の下に折敷が置かれ、そのうえに花びらが散りかかっています。そしてその花びらは、下の絵に描かれた懸樋を伝って家

屋の脇へ流れ出ているのです。

【図1】



桜の木の下に折敷が置かれた絵は③の和歌に対応しており、「惜しき」を同じ音の「折敷」に読み替えて描いたのだと思われます。桜を詠んだ歌は①と②ですが、扇の配置を工夫し、絵画の中で、花びらが③の歌に詠まれた「懸樋」を伝ってくるというストーリー性をつくることで、三つの和歌を関連づけているのです。

2019年1月16日（水）

屏風を観察すると、テキストとして和歌を見るだけではわからない面白い工夫がたくさんあり、さまざまな要素を総合的に鑑賞するものなのだなあということを、改めて実感しました。

4, 屏風という形体

卷子本は、必ず右から左へと鑑賞してゆくものですが、屏風はどのような順番でも見ることができます。冊子本などとも違い、終わりも始まりもないのです。

元の奈良絵本には順番があったのですが、このように屏風に仕立てられたことにより元の配列が分からなくなっており、さらに自由度が高いものとなっています。

閉じたり開いたりする屏風は、扇の在り方と同じだということにも気付きました。屏風というマテリアルをとおして、実際の扇と作中の二次元の扇（絵）とが重なるのです。

扇絵、奈良絵本、屏風というさまざまなマテリアルが混交したこの作品は、とてもたくさんの美意識や遊び心、文化が何層にも重なっており、取組み甲斐がありそうです。

